

2021年度は9人体制のまま、1名を週4日出勤体制の運用とし、継続して検体検査と生理検査間でのローテーションを行い、全体でのカバーリング体制が更に充実した。それにより有給休暇等を取得しやすくなり、また病欠者発生時等のフォローも容易になった。ただし3月からは1名減の正職員8名体制となったため、以前程の余裕は無くなった。

外来採血業務への参入は継続しており、基本週1日だが、外来繁忙時には可能な限りフォローに入っている。

出前・健康講座はコロナ禍のため、検査室からの講座は開催されなかった。

新人看護師を中心としたミニレクチャーは、例年同様に6つのテーマで開催した。

【検体検査】

今年は外注費用を含め、検査材料等の大きな経費削減には繋がらなかったが、毎回期限切れが発生するTriage(尿中薬物検査試薬)を、小単位包装のIVeX-screenへ(10個入りから5個入り)変更した事により期限切れによる破棄が減った。

また検査手順が煩雑であった、CDトキシンの試薬を、検体を滴下するだけの試薬へ変更し業務改善へ繋がった。

2021年度もCOVID-19に翻弄された一年となった。年度末の院内クラスター発生時には、大量のLAMP検査を行う必要があり、休日返上での対応となったが、技師全員の協力の下検査を無事に実施する事ができたのは、非常に有意義であった。

2021年度の検体検査の件数は、2019年度の件数へ戻ったが、COVID-19の増加の影響と思われる(実質2020年度と同等と思われる)。

【生理検査】

ここ数年来実施してきた超音波研修の成果により、心エコーは4名体制、腹部エコーは3名体制となった。さらに他の領域も充実した体制を構築していく必要がある。

COVID-19禍の対応として、エコー検査毎に、ベッドおよびプローブの拭き上げを行っている。

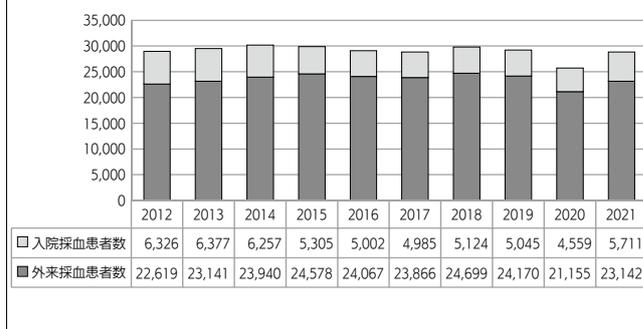
2021年度の生理検査件数は、全体で50件ほど減少した。

【今後の展望】

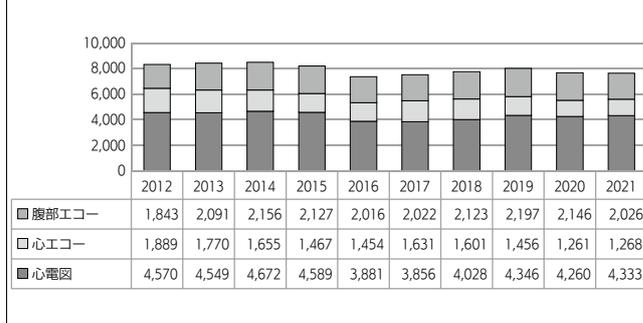
検査室全体のカバーリング体制のさらなる充実による、休みの取りやすい就業環境を整備していく。

実務のマンパワーは充実してきており、来期こそは、もう1名「主任」に登用されることを期待する。今後他部署の連携等を含め、マネジメント力の充実を図りたい。

採血患者数年度別推移



主な生理検査年度別推移



病理・細菌検査年度別推移

